

社会基盤整備特集

暮らしを支える 熱い職人魂

継続が楽しさ生み出す

<配管設備工>



「但馬近畿工業」工事グループ設備部係長
谷垣 宏樹さん

給排水設備、ガス設備、空調設備などに使われる管を取り付ける配管工事分野で、但馬地域最大手の規模を誇る但馬近畿工業。その中で若手のリーダー格として現場を率いるのが、工事グループ設備部係長の谷垣宏樹さんだ。



金属の管を特殊な工具でつなげる谷垣さん。緊急工事で活躍することも――養父市八鹿町

現場では継ぎ手を間に入れながら数がある管をつないで伸ばしていく。旋盤を使って管の端にねじ山を切り、継ぎ手をかませ、パイプレンチを使ってねじ山を合わせつないでいくのだが、「できるだけ継ぎ手を使わずに一気に効率的

につないでいくかが問われる」と谷垣さん。現在従事しているのは食品工場の改装に伴う配管の付け替え工事だ。図面を見ながらの作業になるが、いざ現場に向くと、さまざまなた管や電気配線が複雑に入

建物工事の最初の基礎段階から最後の外部工事まで担当し、一つの現場をじっくり向き合う。「施主から『問題なくきれいにやってもらえた』と喜んでもらったときが一番うれしい」と話す。

同社は養父市や兵庫県と災害協定を結んでおり、破裂した水道管の復旧工事に対応できるよう、24時間態勢で待機しなければならぬ。「水道管の修復は冬でもびしょ濡れになりながらの作業だが、管に関わる仕事は全てが生活、産業のために欠かせないもの。利用者の暮らしのために役立っていると思えばやりがいはある」

この仕事に携わって継続の大切さを学んだという。「慣れないうちはほとんどいことも多いが、あきらめずに続けていると、新たな楽しみが必ず見えてくる」。今春入社予定の2人の新人社員にも、そんなことを伝えようと思っている。

一般的にビルやマンションなどの建築工事現場で高所作業を専門とする職人を指す「とび職」。だがひとくちにとび職といっても、鉄骨を組み立てる鉄骨作業員、溶接などを行う鍛冶作業員、足場を組み立てる足場作業員など、いくつもの専門職に分かれている。

丁寧で美しい足場作る



ビルの改修現場で足場を組み立てる筒井さん。いつも腰に10kgある工具をつけて作業している――姫路市内

「現場は生き物。現場の作業は日々変化するので、足場に載って仕事を職人さんたちがいかに安全に作業しやすいかを常に考えるようにしている。そして、手間や材料を無駄にかけることなく、すき間をしっかり埋めていく」と筒井さん。

18歳のときに父親で社長の筒井弘さんが営む会社の現場に飛び込んだ。初めは高所での作業に恐怖心を感じていたが「今ではだいぶ慣れた」。

同じ現場でも職人によって百人百様のやり方があり、その出来栄で力量が問われる。「機能はそのまま美観に現れる」というのが筒井さんの持論だ。安全を考えてきちんと組み上げられた足場は、芸術品のように整然と美しくなる。「建設工事の現場では、外観の足場の部分が目に入ると触れる。そこがきれいになり、言葉が何よりうれしい」。

「現場で『筒井さんがいるなら安心や』とかけられる言葉が何よりうれしい」。

<とび工>



「筒井組」職長
筒井 忠勝さん

<重機オペレーター>



「宮本組」工務部
葉山 貴澄さん

大阪府北部を流れる一級河川「安威川」で建設中の治水ダムが、宮本組の葉山貴澄さんの今の現場だ。6輪駆動の25トンダンプトラックを運転する毎日。ショベルカーが掘削した土砂を積んで、土砂置き場までを1日平均30回往復し、1日当たり750トンの土砂を運ぶ。

4台のダンプトラックで同じ作業を行っているため、狭く急な斜面の細い道で大型ダンプトラック同士がすれ違

う。待避場所を決め、運転手同士が無線連絡を取り合い、慎重にハンドルを握る。「1往復でも多ければ効率よく運べた証し。無駄なく早く、安全に運ぶことをいつも心掛けている」

大型機械の操作に誇り



25トンダンプトラックを操る葉山さん(車上)。効率よく安全に運ぶことをいつも心掛けている――大阪府茨木市

「初めは緊張して周囲の状況を見渡す余裕がなかったが、徐々に慣れてきた」と葉山さん。

同級生に比べて、重機に乗って働く自分の写真を見せたとき「かっこいいなあ」という言葉が返ってくるという。高さ76・5m、長さ337・5mのダムが完成するのは2020年。そのときにはもう一度、この現場を訪ねようと思っている。

入社してすぐに静岡県の教習所に通い続け、各種大型重機をあらゆる環境で運転できるようにするため、大型1種免許や溶接機を使用するための溶接技能者、地下工事に従事するための酸素欠乏危険作業主任者など10種類以上の免許、資格を3カ月で取得。現場で先輩に見習いとして1ヶ月間を経て、安威川ダムで独立立ち「現場デビュー」を果たした。

が、大型のダンプトラックを一人で操作する気持ちよさは何物にも代えがたい」と顔をほころばせる。

昼休みのわずかな時間を利用して「師匠」と呼ぶ先輩オペレーターの元へ足を運び、ショベルカーの操作をどんなに吸収する。「同じショベルカーでもメーカーによって操作感が異なるのが面白いんです」

<型枠大工>

「ひだか建設」専務取締役工務部長

古森 健司さん



マンションやビルなどを建てる際に、コンクリートを流し込んで壁や柱の形にするための枠を造るのが型枠作業員の仕事だ。ベニヤ板でできた基本形状のパネルに、独自に造ったパーツを現場で組み立てて枠に仕上げていく。

「型枠は高さに対して500分の1程度の誤差しか許されず、非常に細かい精度が求められる。ベニヤ板で枠を造り、組み立てるだけでなく、コンクリートの流し方までを指示できて初めて一人前」と現場の型枠工を統括する古森健司さんは話す。

強い情熱を持ち現場へ



メジャーでパーツを計測する古森さん(奥)。型枠の作業は非常に細かい精度が要求される。姫路市内

でも、あらゆる種類から最適なものを選び抜き、木造大工が使うカンナの研ぎ具合まで入念にチェックしていた。強い情熱があつてこそ、いいものが出来るというところを体感した」と話す。

建築物は用意された設計図通りに造りあげていけばよいわけではない。ある楕円形のビルを担当した時は、設計者の意図をくむために実物大(原寸)で設計図を引き直し、柱の向きや大きさを確かめながら工事を進めた。

「自分がかつて懸念に陥った建物が未来に残っていく。この仕事でどんなに楽しか声を大にして言いたい。死ぬまでこの仕事を続けていってほしい」と

見ればそれだけで建物全ての構造を細部まで立体的にイメージできる。そのイメージを基にどうすればよりよい建物ができるかを指示している。携わった建築物は数え切れないほどだが「近くに行く時は必ず自分が手がけた建物に立ち寄り、大丈夫やなとチェックする」というほど責任感を持って仕事に臨んでいる。

「自分が懸命に働いた建物が未来に残っていく。この仕事でどんなに楽しか声を大にして言いたい。死ぬまでこの仕事を続けていってほしい」と

その言葉は、人材不足が叫ばれる大工の世界に興味を持つ若者へのメッセージでもある。会社に転職した。施工図を

社会基盤整備特集

県内の技能者6人に聞く

土をならし、基礎をつくり、鉄筋を組み合わせ、コンクリートを打ち、配線、配管を施す…。ビルやマンション、住宅などの構造物は分業化された専門職の手で完成へと導かれていく。自分が手掛けた建物で人々が安全かつ快適に暮らし、働けるよう、それぞれの技能で勝負する職人たちは、己の腕に自負を持ち、造り上げていく喜びを感じながら日々現場に向かっている。建設業に携わる職人たちに仕事のやりがいを聞いた。

(取材協力=兵庫県建設業育成魅力アップ協議会)

<電気設備工>



「白菱電気設備」工務部工事課 奥 勝哉さん

工業高校を卒業後、2013年4月に入社して2年目。現在は先輩とともに、事務所や住宅、さらには太陽光発電設備などさまざまな現場を回る日々だ。

この日は先輩2人と、国道9号から湯村温泉に入るT字路に設置されている「交通信号機器」を更新する工事に当たった。朝から雪が降り、手がかじかむような寒さの中での作業。押ボタンや車両感知器で信号を変える交通信号制御機の電気配線をつなぎ、テストで電圧を確かめる姿は、すっかり堂に入っている。

配線への好奇心仕事に



交差点の信号機器の配線工事を行う奥さん。現場は工場、事務所、住宅など多岐にわたる。美方郡新温泉町

「地上にある電柱や専用柱に電線を張る信号の工事は経験したことがあるが、今回は地中埋設配管からの電線を信号機器に接続する工事だった。機器の下を掘り起こし新しい信号機器と配線をつなぐ作業は初めての経験で勉強になった」。小さいころからのものを分解し、仕組みがどうなっているかを調べるのが好きな少年だったという奥さん。工業高校に進学し「ぼんやりと電気に関わる仕事に就きたい」と考えていたが、高校2年のときに白菱電気設備で就業体験(インターンシップ)をする機会があり、そのままこの会社で働きたいと考えた。「高校では実習といっても板にコンセントやスイッチが入社1年目で「第1種電気工事士」の試験に合格した。5年間の実務経験の後、資格が取得できる。「ただ、さまざまな現場で電気工事を手掛けようと思えば、高所作業車運転技能や移動式クレーン運転技能の資格も必要になる。これからのいろいろな資格取得にチャレンジしていきたい」と意欲的だ。

最近先輩社員として、1年生社員を指導する機会もあるという。「先輩だがライバルという意識も強い。早く他の先輩のように、どんな現場でも手際よく仕事ができるようになってほしい」。現場を踏むたび、そんな思いが募っている。

<鉄筋工>



「富田興業」山之口班班長 水島 理晴さん

神戸・ポートアイランド2期南で大型ごみ処理施設の建設が進む。富田興業で鉄筋作業員として働く水島理晴さんはこの日、地面に交差状に寝かせた鉄筋同士を針金で結束する作業に当たっていた。地組みされた鉄筋はその後、クレーンで壁用の鉄筋として立てられ、そこに流し込まれるコンクリートと合わせて構造物を守る。

「建物の命」意識し作業



交差する鉄筋を針金で結束する水島さん。鉄筋は建物の命。神戸市内

水島さんの仕事は現場だけにとどまらない。発注会社から渡される施工図を基に、それぞれの土台、壁、柱などのような鉄筋をどう加工して何本使うのかが分かるように「翻訳」し「加工帳」として仕上げる役割も担う。鉄筋はその情報を基に、同社が持つ国内最大規模の鉄筋加工場で加工された後、現場に搬入さ

れる。「建物が出来上がってしまえば隠れて見えないが、鉄筋は建物の命だと思つて仕事に当たっている」と水島さんは自負をのぞかせる。

建設現場で働く人のニッカ一ポッカー姿に憧れてこの世界に入った。「普段は「やんちゃ」な人たちも、ひとたび現場に入ればきちんといきつをし、規律を守る。きびきびとした男らしい現場の雰囲気も好き」と水島さん。時に100kg近い鉄筋を担ぎながら、幅の狭い足場を歩く危険な作業。ちょっとした気の緩みが大きなけがにつながる。「違う職種の人が集まってお互い声を掛け合い、一つの目標に向かって一体感を持って仕事ができるのも楽しい」。

最近、小学5年の長男に、自身が関わった建物を見せてほしいとせがまれることが増えた。「パパがつくったの、カッコいいな、と言われてうれしかった」。後に続く若年層の従事者が減っていることに気をもむが、この仕事に憧れる人はいると信じている。「いつかは自分が携わったマンションで家族と暮らすのが夢」だ。